

# 母親の「自己統制機能尺度」の作成

The Making of Mothers' Self-control Scale

松 田 久 美

MATSUDA Kumi

北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要

第12号 2021

# 母親の「自己統制機能尺度」の作成

## The Making of Mothers' Self-control Scale

松 田 久 美  
MATSUDA Kumi

### Abstract

In this study, I aimed to make a 'self-control scale'. In the first investigation that was pilot study, I conducted the temporary scale. In the second investigation, I tried to find the structure through factor analysis. In the last investigation of 161 mothers with 4-to 26-month old toddlers, I reconstructed 'self-control scale'. The results showed that the self-control scale was consisted of self-regulation and self-assertion again, the reliability of these two factors, and the validity of the construct of 'self-control scale'.

### I. 問題と目的

母親が有するパーソナリティ特性や、育児に関連するストレスの度合いが、母親の育児意識や育児における感情に影響を及ぼしていることはこれまで多くの研究結果から明らかにされてきた（例えば、野澤, 1989; 佐藤・菅原・戸田・島・北村, 1994, 安藤・無藤, 2008; 荒巻・無藤, 2008; 塩崎・無藤, 2006）。例えば、石・桂田（2010）では、他者との協調的関係を重視する「相互協調性」が高い母親ほどディストレス（うつ傾向や育児不安）は高く、他者と差別される個人の独自性を強調する「相互独立性」が高い母親ほどディストレス

は低くなることが示されている。また、子どもの存在や育児が母親に生きがいや幸福をもたらしとともに、不安や育児困難感といった拮抗した感情を母親にもたらしということも、これまで多くの研究によって明らかにされている（例えば、柏木・若松, 1994; 柏木・平山, 2003; 柏木・平木, 2009; 川井・庄司・千賀・加藤・中村・谷口・恒次・安藤, 1998; 牧野, 1982; 大日向, 1988）。こうした、ネガティブな感情や、喜びと不安が交錯する複雑な感情を多くの母親たちが抱く状況にあってもなお、子どもの感情状態に対応した一貫性のあるはたらきかけや応答をもたらし要因とはいかなるものなのであろうか。その要因を、

母親要因に限定した場合にはいかなる変数が挙げられるだろうか。

その一つとして、母親自身の欲求や意思をコントロールする「自己統制」(Self-Control)の個人差が挙げられる。自身の価値観と現実との間にギャップを感じながら、あるいは、さまざまなストレスに晒されながらも、子どもの感情状態に対応した適切な反応を返そうとする動機づけには、「自己統制」の機能が深く関わっていると考えられるからである。

柏木(1986, 1988)は、児童期における自己統制を検討する上で、人間の行動を、その動機と行動の方向という観点から4種類に分類した。それは、「したくないことをする」、「したいことをしない」、「したいことをする」そして「したくないことをしない」という4つであり、動機と行動の方向が異なる場面では「自己抑制」の側面が機能し、動機と行動の方向が一致する場面では抗議や拒否を含めた「自己主張・実現」の側面が機能すると説明している(柏木, 1986, pp. 5-6)。こうして柏木(1986, 1988)は、自己統制を2つの側面に分けて捉えることにより、その概念整理を果たしたのである。しかしながら、柏木の研究(1986, 1988)以前も、それ以降も、「自己統制」の定義は多様であり、研究者間でかなりの違いが存在し続けている(畠山・戸田, 2000; 塚本, 1997)。例えば、氏家(1978)は、「ある行為の結果を予測し、それに基づいて何らかの制御プランを実行すること」と定義し、4歳児、6歳児、8歳児を対象として実験を行い、誘惑に耐える力とそのために用いる行動パターンにおける年齢群間の違いを検討した。Thorensen and Mahoney(1974)は、「直接的な外的強化が相対的に欠如している

状況において、選択可能な他の行動よりも生起確率の低い行動を行うこと」と定義して、自己統制に価値を置く理由を3点挙げている。それはまず、生体の生命の維持に重要な役割を果たしているというものであった。2点目は、社会と密接に関係しているという理由であり、3つ目に、他者の命令や統制に従った行動ではなく、自分自身の意志に基づく行動であることを挙げている。このように様々に定義され、概念が精緻化されないままに、自己統制と個人の認知や行動パターンとの関係性に関する研究(例えば、樋口・鎌原・清水・大塚, 1982; Kopp, 1982; Levenson, 1974; Rotter, 1966, 園田・神宮, 1983)が国内外で多数行われていた。また、柏木(1986, 1988)の後も、国内では、例えば、庄司(1993)は、「動機があるが、社会的にも個人的にも価値がないから行動しない、あるいは動機はないが、社会的にも個人的にも価値があるから行動することである」と定義して、児童を対象とする研究を行った。また、「自己の意志に基づき、直接的な外的強化なしに、自らの行動を調節しようとする能力」と定義した幼児を対象とする研究(中田, 2000)や、「個人が自分の行動や情動、心身の状態を一定の秩序に向けて統制・調整すること」という定義に基づいて、ストレスを自己統制する尺度を作成し、青年を対象とする調査を行った研究(佐藤・河合, 2004)もある。そうした中、塚本(2002)は、柏木(1986, 1988)の概念整理を受け、自己主張・実現と自己抑制はそれぞれ個人的な側面と対人的な側面を持つとして、二次元を仮定した中学生の自己統制尺度を作成した。岡田(2004)は、柏木(1988)と塚本(2002)を参考として、幼児期の子ど

もの自己統制尺度を作成した。またこうした変遷の中で、幼児期・児童期・青年期における自己統制を測定する尺度もいくつか作成されてきた。しかし、幼い子どもを養育中の母親の自己統制を測定する尺度は見当たらない。そこで本研究では、生活者として、母親として、母親たちが抱える欲求や意志、及びその行動をコントロールする機能を測定する尺度の作成を目的として、予備調査、及び調査1と調査2を行う。

## Ⅱ. 予備調査：質問項目の作成

子育て中の母親に、日々の暮らしの中で感じる自己統制をする場面（自分の気持ちを抑えた行動と自分の気持ちに即した行動）について自由記述を求め、その内容を分析した。

### 1. 方法

#### 1) 協力者

生後4～18ヶ月までの乳児を持つ母親40名（21～38歳， $M = 33.20$ ,  $SD = 4.76$ ）であった。

#### 2) 手続き

北海道E市の子育てサークル、乳児保育園、子育て支援センターを訪問し、調査目的と方法を説明した上で、口頭での承諾を得た後、質問紙を配布した。各協力者の回答が終わり次第、回収した。回答は自由記述式であり、質問内容は以下の通りであった。

#### 【質問内容】

以下の質問について、思いつくことをいくつでも書いてください。

1. 「現在のあなたの生活全体の中で、自分の気持ちを抑えて（欲求・欲望に反して）、①したいのにしていないこと②したくないの

にしていることとは、どんなことですか？」

2. 「現在のあなたの生活全体の中で、自分の気持ちを表に出して、①したいから、していること（抗議や拒否を含みます）、②したくないから、していないこととは、どんなことですか？」

## 2. 結果

回答は、自己抑制と自己主張・実現の二つの側面のそれぞれについて自由記述されていた。自己抑制と自己主張・実現のそれぞれに関する回答を、K-J法により、似た内容のものを整理・分類してグルーピングした（Table 1）。

さらに、束ねられたグループのそれぞれについて、内容の要点から文章化し、自己抑制16項目、自己主張・実現16項目を作成して、自己統制を捉える仮尺度とした（Table 2）。

## Ⅲ. 調査1：尺度の作成と信頼性の検討

仮尺度の質問項目に対する回答を得点化し、因子分析の結果から因子構造を捉え、信頼性分析により $\alpha$ 係数を求めた。

### 1. 方法

#### 1) 協力者

生後4ヶ月～23ヶ月までの乳児を持つ母親52名（22～38歳， $M = 34.20$ ,  $SD = 4.83$ ）であった。

#### 2) 手続き

北海道S市内の乳児保育園、E市内の子育てサークル、幼児教室などを訪問し、調査目的と方法を説明した上で、口頭での承諾を得た後、質問紙を配布した。各協力者の回答が終わり次第、回収した。

予備調査の結果に基づく、自己統制の「仮尺度」（Table 2）の質問項目をランダムに並べて質問紙を作成した。そして、各項目に

Table 1 母親の自己統制の分類

側面	概念	自由記述内容例
自己抑制	自分の気持ちを抑えて(欲求・欲望に反して)行動するといった、動機と行動の方向が異なる場合に機能する側面。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・したいことをしない</li> <li>・自分がしたいことを始めたときでも、子どもが「遊ぼう」の意思表示をしてくるなどすると、中断する。</li> <li>・自分の洋服や化粧品を選んだり、ゆっくり食事がしたいが、がまんしている。</li> <li>・登山やスキーなどしたいが、がまんしている。</li> <li>・のんびりする時間が欲しいががまんしている。</li> <li>・夫と二人きりで食事をしたいががまんしている。</li> </ul>
	自己統制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・したくないことをする</li> <li>・苦手なアイロンかけやお裁縫も仕方なく、がんばってしている。</li> <li>・庭の手入れや、除雪などしたくないが、仕方なくしている。</li> <li>・時間外の勤務はしたくないが、している。</li> </ul>
自己主張・実現	自分の気持ちを表に出して行動するといった、動機と行動の方向が一致する場合に機能する側面(抗議や拒否を含む)。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・したいことをする</li> <li>・眠いときには、子どもと一緒に昼寝をしている。</li> <li>・HP作りが好きなのでしている。</li> <li>・家事の手抜きをしたいときにはしている。</li> <li>・外出したいとき(ストレスがたまったと感じたとき)には、夫などに子どもを任せて、出かける。</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・したくないことをしない</li> <li>・子どもの断乳やトイレトレーニングは、おっくうなのでしていない。</li> <li>・雑草の処理は、したくないのでしていない。</li> <li>・舅や姑との交流はしたくないのでしていない。</li> </ul>

対する回答を、「1. いいえ」、「2. いいえに近い」、「3. どちらでもない」、「4. はいに近い」、「5. はい」から求めた。調査後、項目分析(度数分布の分析、因子分析)をして質問項目を選定し、尺度の信頼性も検討した。

## 2. 結果と考察

まず、自己抑制の各項目への回答の度数分布を求めたところ、項目2は、「4. はいに近い」と「5. はい」を合わせると90.4%であり、著しい偏りが認められ、項目11も、「3. どちらでもない」、「4. はいに近い」と「5. はい」を合わせると90.0%を超えるといった偏りが認められたため、除くこととした。残り14項目に因子分析を試みた結果、最初に想定していたように一つの内容ではなく、異なる内容が混在しているのではないかと考えられた。そこで、各項目を差し替えながら、さまざまな組み合わせで因子分析を行ったと

ころ、6項目が第1因子および第2因子に負荷する結果(Table 3)を得た(主因子法、ヴァリマックス回転)。

第1因子に負荷した項目は、項目6「ゆっくり商品を選ぶとか、ボーっとテレビを見るなどしたいが、がまんしている」、項目7「子ども抜きで、映画を見たり、ショッピングを楽しみたいが、がまんしている」といった、自分の気持ちを抑え、自分は日々がまんをしているという実感を表している項目として捉えられる。したがって、「がまん尺度」と命名した。一方、第2因子に負荷した項目は、「苦手だったり、したくないと思う家事もがんばってしている」、「どんなにしたくないことでも頑張っている」など、(欲求・欲望に反して)自分の気持ちを抑えながらも、子どもと向き合い、子育てに取り組もうとしている前向きな自分に対する評価を表す項目とし

Table 2 自己統制仮尺度

No.	項 目
<b>自己抑制の仮尺度</b>	
①	夜更かしをして自由な時間を過ごしたいときにも、翌日の睡眠不足を避けるため早く寝る。
②	町内会の役員など仕方なく引き受けた役割であっても、きちんと果たそうとする。
③	育児中なので、したいことはほとんどがまんしている。
④	疲れが残っているような眠い朝も、家族のために出来るだけ早起きする。
⑤	苦手だったり、したくないと思う家事労働もがんばってしている。
⑥	ゆっくり商品を選ぶとか、ポーっとテレビを見るなどしたいが、がまんしている。
⑦	子ども抜きで、映画を見たり、ショッピングを楽しみたいが、がまんしている。
⑧	どんなにしたいくないことであっても、がんばってしている。
⑨	自分のペースで物事が進まないときにも、イライラしないよう自分を抑える。
⑩	時間が足りなくてがまんしていることがたくさんある。
⑪	会いたくない人とも、表情や態度に出さずに付き合う。
⑫	自分の都合や気分で、子どもの前でイライラしたり、怒ったりしないよう努めている。
⑬	毎日の家事はイヤになるが、やむを得ずしている。
⑭	お金を貯めても、欲しいものがあったら買ってしまう。
⑮	自分がしたいことをし始めたとき、子どもがぐずりはじめたり、「あそぼう」の意思表示をしてくると、中断する。
⑯	親の都合で子どもをだらだらと起こしておかないよう、決まった時間に寝かしつけるようにしている。
<b>自己主張・実現の仮尺度</b>	
①	自分にとっての優先順位を守って生活している。
②	常に、自分の目標を達成しようと努力している。
③	自分の可能性を十分に発揮しようとしている。
④	すべきだと思うことは、どんどん実行する。
⑤	自分の意見や態度をはっきりと示し、簡単に妥協しない。
⑥	言いたいことをなかなかはっきりと言えない。
⑦	自分がしたいことやしていることについて、夫や家族にちゃんと理解してもらえるよう説明する。
⑧	不当だと思うことについては、抗議する。
⑨	イヤなことであっても、なかなか「いやです」と言えない。
⑩	頼まれると、なかなか断ることが出来ない。
⑪	困っている様子の人を見かけたら、すすんで言葉をかける。
⑫	相手が悩んでいることに気づいたら、どうしたら力になれるか、どんな解決策があるかについて積極的に考える。
⑬	誘われることが多く、自分からあまり誘わない。
⑭	他人の意見や希望に合わせることが多い。
⑮	街や電車の中などで、ルール違反やマナー違反を見かけたら、注意する。
⑯	誤解を受けたときには、きちんと事情を説明して了解を求める。

て捉えられる。したがって、こうした項目から成る尺度を「がんばり尺度」と命名し、「がまん尺度」と「がんばり尺度」の二つを「自己抑制尺度」の下位尺度とした。

続いて、6項目を負荷した因子ごとに分類し、得点を算出した。この際、二つの因子における項目に、マイナスに負荷した項目はなかったことから、そのまま合計して、それぞれの  $a$  係数を求めた。また、項目3の「育児中なので、したいことはほとんどがまんしている」は、第1因子と第2因子の両方に負

荷していたため、どちらの因子の信頼性分析にも用いられた。こうして求めた、第1因子における信頼性係数は  $a = .77$  であり、第2因子における信頼性係数は  $a = .72$  であった。このことはすなわち、「自己抑制尺度」の下位尺度「がまん」と「がんばり」のそれぞれの信頼性係数が、 $a = .77$  と、 $a = .72$  であったことを意味している。

一方、自己主張・実現尺度の各項目への回答の分布を求めたところ、項目11と12は、「3. どちらでもない」、「4. はいに近い」



と「5. はい」を合わせると 90%を超えるといった偏り（天井効果）が認められたため、除くこととした。残りの 14 項目の因子分析（主成分分析，回転なし）の結果，項目 1, 10, 13 以外の全ての項目が第 1 因子に負荷していた（Table 4）。項目 4「すべきだと思ふことは，どんどん実行する」，項目 16「誤解を受けたときには，きちんと事情を説明して了解を求める」など，自分の気持ちを表に出した行動に正の負荷が高く，項目 6「言いたいことをなかなかはっきりと言えない」，項目 9「イヤなことであっても，なかなか『イヤです』と言えない」など，自分の気持ちを表に出せずにいる行動にマイナスの負荷が高いことから，この因子は，自己主張・実現を

あらわしていることが確認され，これらを 1 つの尺度とすることが適当であると考えられた。逆転項目を考慮しながら，得点を算出し，全 11 項目から成る尺度の信頼性係数（Cronbach）を求めた。信頼性係数は  $\alpha = .83$  であった。

以上の結果から，「自己抑制尺度」の二つの下位尺度の信頼性を示す係数は，「がまん尺度」が  $\alpha = .77$ ，「がんばり尺度」が  $\alpha = .72$ ，「自己主張・実現尺度」は  $\alpha = .83$  であった。こうして求められた係数は，それぞれを測定する尺度として十分な信頼性を示す値であったため，これら二つの尺度を，自己統制の二側面のそれぞれを捉える尺度として設定し，二つの尺度を合わせて「自己統制機能

Table 3 自己抑制尺度の因子分析結果（ヴァリマックス回転後）

No.	項 目	F1	F2	$h^2$
③	育児中なので，したいことはほとんどがまんしている。	.51	.54	.55
⑤	苦手だったり，したくないと思う家事労働もがんばってしている。	.08	.72	.53
⑥	ゆっくり商品を選ぶとか，ボーっとテレビを見るなどしたいが，がまんしている。	.53	.06	.62
⑦	子ども抜きで，映画を見たり，ショッピングを楽しみたいが，がまんしている。	.85	.29	.81
⑧	どんなにしたくないことであっても，がんばってしている。	.19	.66	.48
⑩	時間が足りなくてがまんしていることがたくさんある。	.64	.16	.43
	寄 与	2.84	1.19	
	寄 与 率	47.31	19.89	

Table 4 自己主張・実現尺度の因子分析結果

No.	項 目	F1
②	常に，自分の目標を達成しようと努力している。	.46
③	自分の可能性を十分に発揮しようとしている。	.66
④	すべきだと思ふことは，どんどん実行する。	.55
⑤	自分の意見や態度をはっきりと示し，簡単に妥協しない。	.60
⑥	言いたいことをなかなかはっきりと言えない。	-.64
⑦	自分がしたいことやしていることについて，夫や家族にちゃんと・・・。	.44
⑧	不当だと思ふことについては，抗議する。	.70
⑨	イヤなことであっても，なかなか「イヤです」と言えない。	-.77
⑭	他人の意見や希望に合わせることが多い。	-.45
⑮	街や電車の中などで，ルール違反やマナー違反を見かけたら，注意する。	.59
⑯	誤解を受けたときには，きちんと事情を説明して了解を求める。	.49
	寄 与	3.78
	寄 与 率	32.87

※ 6, 9, 14は逆転項目。

尺度」と名付けた。

#### IV. 調査2:「自己統制機能尺度」の改訂

##### 1. 問題と目的

調査1によって、自己統制を、「自己の欲求を抑制し、自律的な行動を起こす側面と、自己の欲求や意志を表現し、行動としても実現しうる自己主張・実現に関する側面を併せ持つ機能」と定義し、生活者として、母親として、母親が抱える欲求や意志、及びその行動をコントロールする自己統制の両側面を捉える「自己統制機能尺度」を作成した。しかし、この尺度を用いて調査を行ったところ、得られた結果についての解釈に困難さがあった。そのことには、2点の要因が関わっている可能性が考えられる。その一つ目には、自己抑制尺度の下位尺度「がんばり尺度」の中にある、例えば、「苦手だったり、したくないと思う家事労働もがんばってしている」という項目は、「前向きに力を尽くしている」といった意味合いを持ち、「常に、自分の目標を達成しようと努力している」、「自分の可能性を十分に発揮しようとしている」といった自己主張・実現の高さを表す項目の内容とよく似ている点が挙げられる。すなわち、「自己主張・実現」の側面と「自己抑制」の側面のどちらの意味も併せ持つ項目が、二つの尺度の中に幾つも混在していることが一つ目の要因である可能性が考えられる。このことには、予備調査及び調査1における、「自己主張・実現」の側面と「自己抑制」の側面を、最初から別々に分析した「尺度構成までの手順」が関わっている可能性も考えられる。

もう一つの要因として、自己抑制尺度は、少ない項目数から構成されているにもかかわらず、

その下位尺度の両方に負荷している項目があることが挙げられる。自己抑制尺度の下位尺度「がんばり尺度」は4項目、「がまん尺度」は3項目から構成されているが、その中の「育児中なので、したいことはほとんどがまんしている」という項目は、「がんばり」と「がまん」の両方に中程度の正の負荷を示していた。このように、どちらの下位尺度にも負荷する項目が含まれていることもまた、尺度の構造を複雑にし、柏木(1986)による自己統制に関する理論に沿った解釈を難しくしている可能性が考えられた。

以上のことから、より単純な構造を持ち、「したいことをする」、「したくないことをしない」という動機と行動の方向が一致する「自己主張・実現」と、「したくないことをする」、「したいことをしない」という動機と行動の方向が異なる「自己抑制」を下位概念とする「自己統制」(柏木, 1986)を、理論との整合性を持って測定し得る尺度の開発を目指し、「自己統制機能尺度」の改訂を試みた。

そのために、調査1で作成した「自己主張・実現尺度」における11項目と、「自己抑制尺度」における6項目を合わせた17項目に、自己統制に関する理論(柏木, 1986, 1988)に基づき、以下の項目を改変して加える、あるいは複数の項目を統合して加えることにより、ここでも仮尺度項目の設定を行った(Appendix A)。加えた質問項目は、柏木・若松(1994)で作成された「親の発達尺度」の第2因子「自己抑制」のうちの「他人の迷惑にならないように心がけるようになった」、「自分の欲しいものを買わずにがまんできるようになった」、「自分本位な考えや行動をしなくなった」の3項目であり、「他人の迷惑



にならないようにしている」, 「自分の欲しいものを買わずにがまんしている」, 「自分本位な考えや行動をひかえている」と改変して加えた。また, 第6因子「自己の強さ」のうちの「多少他の人との摩擦があっても, 自分の主義は通すようになった」, 「自分の立場や考えは, しっかりと主張しなければと思うようになった」という2項目についても, 「多少他の人との摩擦があっても, 自分の主義は通している」, 「自分の立場や考えは, しっかりと主張する」と改変して加えた。また, 畠山・戸田(2000)による青年前期の「自己抑制尺度」の第1因子「外的刺激」のうちの「遊んでいる時でも, 親から用事を頼まれたらやります」, 「テレビを見たくても, 勉強中は見ません」, 「親や先生に腹の立つことを言われても, 我慢して聞きます」という項目と, 調査1で作成した「自己抑制尺度」の下位尺度「がんばり」にある「どんなにしたくないことも

頑張っている」という項目とが, よく似た質問内容であったので統合し, 「あまりしたくないこともがんばってしている」という項目として用いることとした。こうして設定した, 合わせて22項目の語尾を揃え, 修正版仮尺度の質問項目とした(Table 5)。

これらの仮尺度の質問項目もまた, 柏木(1986)による自己統制に関する理論に基づき設定した項目であることから, 結果として求められる因子は二つであり, その内面的意味は, 自己主張・実現と自己抑制の二側面を表すものであることが予測された。

## 2. 方法

### 1) 協力者と手続き

協力者は, 以下の時期に別々の質問紙調査に協力してくれた計161名の母親であった。いずれも生後4-26ヶ月の乳児を持つ母親であり, その年齢は, 22~42 ( $M = 31.7$ ,

Table 5 母親の自己統制尺度の修正用仮尺度の平均値と標準偏差

質問項目	M	SD
1 他人の迷惑にならないようにしている。	4.07	0.90
2 自分の欲しいものなどを買わずにがまんしている。	3.29	1.12
3 自分本位な考えや行動をひかえている。	3.43	1.05
4 自分の可能性を十分に発揮しようとしている。	3.24	1.05
5 多少他の人との摩擦があっても, 自分の主義は通している。	2.95	1.31
6 自分の立場や考えは, しっかりと主張する。	3.30	1.20
7 自分の意見や態度をはっきりと示し, 簡単に妥協しない。	3.22	0.98
8 常に, 自分の目標を達成しようと努力している。	3.49	1.24
9 あまりしたくないこともがんばってしている。	3.52	1.09
10 街や電車の中などで, ルール違反やマナー違反を見かけたら注意する。	3.06	1.26
11 言いたいことをなかなかはっきりと言えない。	3.52	1.36
12 自分がしたいことやしていることについて, 夫や家族にちゃんと理解してもらえるよう説明する。	3.85	0.92
	3.24	1.20
13 不当だと思うことについては, 抗議する。		
14 イヤなことであっても, なかなか「いやです」と言えない。	3.40	1.00
15 他人の意見や希望に合わせることが多い。	2.10	0.92
16 誤解を受けたときには, きちんと事情を説明して了解を求める。	3.47	1.00
17 すべきだと思うことは, どんどん実行している。	2.98	1.14
18 時間が足りなくてがまんしていることがたくさんある。	3.81	1.08
19 育児中なので, したいことはほとんどがまんしている。	3.23	1.12
20 苦手だったり, したくないと思う家事労働もがんばってしている。	3.94	1.02
21 ゆっくりと商品を選ぶとか, ボーっとテレビを見るなどしたいが, がまんしている。	2.90	1.06
22 子ども抜きで, 映画を見たり, ショッピングを楽しみたいが, がまんしている。	3.39	1.28

SD = 5.65) 歳であった。北海道 S 市内乳児保育園, E 市内の子育てサークル, 幼児教室を訪問して同意書及び質問紙を配布し, 後日回収した。

## 2) 調査内容

尺度構成の検討には, 調査 1 で作成した 16 の質問項目に, 新たに 5 項目を加えて設定した全 22 項目を用いた (Table 5)。これらの項目に対する回答を, 調査 1 と同様に, 「1. いいえ」「2. いいえに近い」「3. どちらでもない」「4. はいに近い」「5. はい」の 5 件法によって得られた回答を 1~5 で得点化し, 再度検討した。

## 3. 結果と考察

データ分析はすべて, SPSS12.0J (SPSS Japan Inc.) を用いて行った。自己統制に関する理論 (柏木, 1986) に基づき設定した「母

親の自己統制」に関する 22 項目の平均値, 標準偏差を算出し, 天井効果と床効果を検討した。5 件法であることから, 各質問項目への回答が, 平均値 + 1SD > 5 とならないことの確認により天井効果を, 平均値 - 1SD < 1 とならないことの確認によって床効果を検討したが, 該当する項目はなかった (Table 5)。

したがって, 全 22 項目に対して探索的因子分析 (主因子法, 回転なし) を行った。固有値 1 以上の基準を設け, さらにスクリープロットの勾配を考慮して, 2 因子構造を採用した。次に, どちらの因子にも十分な因子負荷量を示さなかった (40 未満であった) 3 項目 (Table 3. 2. 1 の 5, 10, 21) を分析から除外し, 2 因子を仮定して再度, 因子分析 (主因子法, プロマックス回転) を行った。項目内容の内面的意味及び因子パター

Table 6 自己統制機能尺度の因子分析結果 (プロマックス回転後の因子パターン)

質問項目	F1	F2
F1: 自己主張・実現 ( $\alpha = .84$ )		
11 言いたいことをなかなか口に出して言えない。	-.78	.34
8 常に自分の目標を達成しようと努力している。	.70	.04
14 イヤなことであっても, なかなか「いやです」と言えない。	-.69	-.07
7 自分の意見や態度をはっきりと示し, 簡単に妥協しない。	.68	-.02
1 他人の意見や希望に合わせることが多い。	-.57	.11
17 すべきだと思うことは, どんどん実行している。	.53	.28
6 自分の立場や考えはしっかりと主張する。	.52	.07
4 自分の可能性を十分に発揮しようとしている。	.48	.34
16 誤解を受けたときには, きちんと事情を説明して了解を求める。	.47	.27
13 不当だと思うことについては, 抗議する。	.46	.27
12 自分がしたいことやしていることについて, 夫や家族にちゃんと理解してもらえるよう説明する。	.40	.24
F2: 自己抑制 ( $\alpha = .74$ )		
9 あまりしたくないことも, がんばってしている。	.14	.58
3 自分本位な考えや行動をひかえている。	.23	.54
20 苦手だったり, したくないと思う家事労働もがんばってしている。	-.06	.54
22 子ども抜きで, 映画を見たり, ショッピングを楽しみたいががまんしている。	-.22	.52
19 育児中なので, したいことはほとんどがまんしている。	-.12	.51
1 他人の迷惑にならないようにしている。	.09	.51
2 自分の欲しいものなどを買わずにがまんしている。	.10	.47
18 時間が足りなくてがまんしていることがたくさんある。	-.04	.42
因子間相関		
F1	1.00	.12
F2		1.00

ンから、11項目からなる第1因子と、8項目からなる第2因子が得られた (Table 6)。

こうして求められた因子構造は、「自己統制は、自己主張・実現の側面と自己抑制の二側面を有する」(柏木, 1986) という理論的に仮定された構造と一致しており、これにより、この尺度の構成概念妥当性が確認された。また、各因子の信頼性係数 (Cronbach) は、第1因子が  $\alpha = .84$ 、第2因子は  $\alpha = .74$  であり、どちらの因子についても高い内的整合性が認められた。以上から、第1因子を「自己主張・実現」、第2因子を「自己抑制」と命名し、各因子を構成する質問項目に対する回答から算出される得点を自己統制の下位尺度得点とすることに問題はないと考えられた。こうして、「自己統制機能尺度」の修正版が完成した。

## V. 文 献

- 安藤智子・無藤 隆. (2008). 妊娠期から産後1年までの抑うつとその変化: 縦断研究による関連要因の検討. *発達心理学研究*, 19, 238-293.
- 荒巻美佐子・無藤 隆. (2008). 育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い: 未就学児を持つ母親を対象に. *発達心理学研究*, 19, 87-97.
- 畠山和也・戸田須恵子. (2000). 青年期における自己統制力質問紙作成の試み. *北海道教育大学紀要 (教育科学編)*, 51 (1), 75-89.
- 樋口一辰・鎌原雅彦・清水直治・大塚雄作. (1981). 原因帰属様式 (Attribution Styles) に関する研究 (3): 女子大学生の原因帰属様式と抑うつ傾向並びに統制感との関係. *東京工業大学人文論叢*, 7, 141-149.
- 柏木恵子. (1979). 母親の母性意識について: 一般の母親と母子寮の母親の比較を通して. *母子研究*, 2, 22-33.
- 柏木恵子. (1986). 自己制御 (self-regulation) の発達. *心理学評論*, 29, 3-24.
- 柏木恵子. (1988). 幼児期における「自己」の発達: 行動の自己制御機能を中心に. 東京: 東京大学出版社.
- 柏木恵子・平山順子. (2003). 結婚の現実と夫婦関係満足度との関連性: 妻はなぜ不満か. *心理学研究*, 74, 122-133.
- 柏木恵子・平木典子. (2009). 家族の心はいま: 研究と臨床の対話から. 東京: 東京大学出版社.
- 柏木恵子・若松素子. (1994). 「親となる」ことによる人格発達: 生涯発達の視点から親を研究する試み. *発達心理学研究*, 5, 72-83.
- 川井 尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中村 敬・谷口和加子・恒次欽也・安藤朗子. (1998). 育児不安に関する臨床的研究 IV: 育児困難感のプロフィール評定試案. *日本子ども家庭総合研究所紀要*, 34, 日本子ども家庭総合研究所, 東京, 117-139.
- Kopp, C. B. (1982). Antecedents of self-regulation: A developmental perspective. *Developmental Psychology*, 18, 199-214.
- Levenson, H. (1974). Activism and Powerful Others: Distinction within the concept of internal- external control. *Journal of Personality Assessment*, 38, 337-383.
- 牧野カツコ. (1982). 乳幼児を持つ母親の生活と育児不安. *家庭教育研究所紀要*, 3, 34-56.
- 中田 栄. (2000). 向社会的行動における自己

- 統制の役割とその規定要因の検討. 東京：風間書房.
- 野澤みつえ. (1989). 親業ストレスに関する基礎研究. *教育学科研年報*, 15, 35-56.
- 岡田いずみ. (2004). 幼児の自己統制力の構造とその発達：2次元自己統制尺度の研究. *早稲田大学大学院教育学研究科紀要*, 別冊 11 (2), 1-10.
- 園田雅代・神宮英夫. (1983). 健康安全行動における幼児の自己統制力：P-F スタディ的手法による評価. *教育心理学会総会論文集*, 25, 214-215.
- 小野寺敦子. (2003). 親になることによる自己概念の変化. *発達心理学研究*, 14, 180-190.
- 大日向雅美. (1988). *母性の研究*. 東京：川島書店.
- 大竹恵子・島井哲志・内山喜久雄・宇津木成介. (2001). 情動知能尺度 (EQS：エクス) の開発と因子的妥当性, 信頼性の検討. *産業ストレス研究*, 8, 153-161.
- Rotter, J. B. (1966). Generalized expectancies for internal vs. external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, 80, 1-28.
- 佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島 悟・北村俊則. (1994). 育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連. *心理学研究*, 64 (6), 409-416.
- 石 峻玲・桂田恵美子. (2010). 保育園児を持つ母親のディストレス：相互協調性・相互独立性およびソーシャル・サポートとの関連. *発達心理学研究*, 21, 138-146.
- 塩崎尚美・無藤 隆. (2006). 幼児に対する母親の分離意識：構成要素と影響要因の. *発達心理学研究*, 17, 39-49.
- 庄司一子. (1993). 児童の self-control の発達の検討. *教育相談研究*, 31, 47-58.
- 詫摩武俊・戸田弘二 (1988). 愛着理論からみた青年の対人態度：成人版愛着スタイル尺度作成の試み. *東京都立大学人文学報*, 196, 1-16.
- Thorensen, C., & Mahoney, M. J. (1974). *Behavioral self-control*. New York: Holt.
- 塚本伸一. (1997). 子どもの自己統制に関する研究心理学的研究の動向 (2). *上越教育大学紀要*, 16, 421-442.
- 塚本伸一. (2002). 子どもの自己統制に関する研究：2次元自己統制尺度の試み. *日本教育心理学会第 66 回大会発表論文集*, 1052.
- 氏家達夫. (1978). 自己統制に関する研究：誘惑に対する抵抗について. *教育心理学会総会論文集*, 20, 160-161.

## Appendix A : 仮尺度質問項目

- |   |   |   |
|---|---|---|
| <p>1 他人の迷惑にならないようにしている。</p> <p>2 自分の欲しいものなどを買わずにがまんしている。</p> <p>3 自分本位な考えや行動をひかえている。</p> <p>4 自分の可能性を十分に発揮しようとしている。</p>   | } | <p>「親の発達尺度」(柏木・若松, 1994) の第II<br/>因子「自己抑制」の中の3項目を改変して使<br/>用</p>  |
| <p>5 多少他の人との摩擦があっても、自分の主義は通して<br/>いる。</p> <p>6 自分の立場や考えは、しっかりと主張する。</p> <p>7 自分の意見や態度をはっきりと示し、簡単に妥協しな<br/>い</p> <p>8 常に、自分の目標を達成しようと努力している。</p>   | } | <p>「親の発達尺度」(柏木・若松, 1994) の第IV<br/>因子「自己の強さ」の中の2項目を改変して<br/>使用</p>   |
| <p>9 あまりしたくないこともがんばってしている。</p>  |   | <p>「青年前期における自己抑制尺度」(畠山・戸<br/>田, 2000) の第I因子「外的刺激」の中の3<br/>項目と、本稿 2.1 で作成した「どんなにした<br/>くないことであっても、頑張っている」<br/>という質問項目とを統合して使用。</p> |
| <p>10 街や電車の中などで、ルール違反やマナー違反を見か<br/>けたら注意する。</p> <p>11 言いたいことをなかなかはっきりと言えない。</p> <p>12 自分がしたいことやしていることについて、夫や家族<br/>にちゃんと理解してもらえるよう説明する。</p> <p>13 不当だと思うことについては、抗議する。</p> <p>14 イヤなことであっても、なかなか「いやです」と言え<br/>ない。</p> <p>15 他人の意見や希望に合わせることが多い。</p> <p>16 誤解を受けたときには、きちんと事情を説明して了解<br/>を求める。</p> <p>17 すべきだと思うことは、どんどん実行している。</p> <p>18 時間が足りなくてがまんしていることがたくさんあ<br/>る。</p> <p>19 育児中なので、したいことはほとんどがまんしている。</p> <p>20 苦手だったり、したくないと思う家事労働もがんばっ<br/>てしている。</p> <p>21 ゆっくりと商品を選ぶとか、ポーっとテレビを見るな<br/>どしたいが、がまんしている。</p> <p>22 子ども抜きで、映画を見たり、ショッピングを楽しみ<br/>たいが、がまんしている。</p> |   |   |